



写真-1 揖保川左岸堤防から「与位の洞門」を撮影（平成28年4月）

■ 「下ほきの奇巖」を穿つ～「与位の洞門」

写真-1 は、宍粟（しろう）市山崎町与位（よい）にある名勝「与位の洞門」です。

この付近は、『宍粟郡誌』に紹介されている「下岨（しもほき）の奇巖」と呼ばれる「奇景」として有名です。「岨」という字は、中国で生まれた漢字ではなく、日本人が考え出した「和製漢字」で、別名「国字」と呼ばれるものです。衤（かみし）、凵（なご）、峠（とうげ）、柈（とち）、榊（さかき）、糒（こうじ）、辻（つじ）、杣（そま）、枡（ます）、鰯（いわし）などが国字に該当します。

ただ、「岨」は「ほき」ではなく「たわ」と読み、「撓む（たわむ）」からできた言葉です。尾根が撓んだ低いところ、連なった山の峰と峰の間のくぼんだ所、あるいは勾配の緩やかな峠道のことを意味し、「与位の洞門」付近の険しい地形に相応しい字ではありません。また、「岨」を「ほき」と読んでいる文献はいくら探しても見つからず、『広辞苑』（新村出編・平成3年11月）で「ほき」をみると、「山腹の険しい所」を意味する「崖」の字が充てられていました。どうやら「奇景」にあてがう字を間違えたようです。

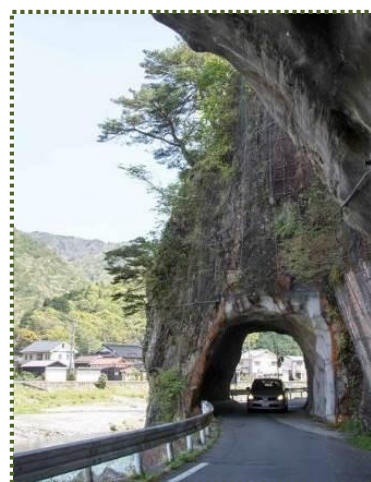


写真-2 与位の洞門

■ 阿波の秘境「大歩危・小歩危」も「ほき」が転訛

「ほき」は、元々「崖」を意味していますが、川の水がぶつかるような断崖を示していることもあります。阿波の秘境として有名な吉野川上流の「大歩危（おおほけ）・小歩危（こほけ）」の「ほけ」は、この「ほき」が転訛したものとされています。

地名の由来は、「大股で歩くと危ないから大歩危」、「小股で歩いてても危ないから小歩危」という説もあります。明治6(1873)年の地租改正の際に当時の三名村(さんみょうそん:現・徳島県三好市山城町)は、「おおほけ」には「大歩怪」の字を充て、「こほけ」には「小歩危」の字を充てていて、後に「小歩危」に合わせて「大歩危」と表記するようになったそうです。



写真-3 大歩危(大歩危峡遊覧船から撮影)



写真-4 小歩危(「歩危茶屋」から土讃線・第二吉野川橋梁を撮影)

■ 近くて遠い田井への道～山と揖保川に囲まれた与位地区の孤立化との闘い

山と揖保川に囲まれた与位地区は、急峻な山を登らず、北回りに迂回をせず、水に浸らずに、最短距離、最短時間で、南隣りの田井地区や山崎方面へ行くには、「下ほきの奇巖」の険しくそそり立つ崖を通るしかありません。

そこで、いつの頃かは不明^{*1}ですが、与位地区の村人は、「下ほきの奇巖」に四角い穴(27cm×25cm、奥行き43cm)をあけ(写真-5)、そこに角材(腕木)を差し込み、その角材を直径10cm程度の支柱で支え、角材の上に板を渡して栈橋をつくりました(図-1 参照)。

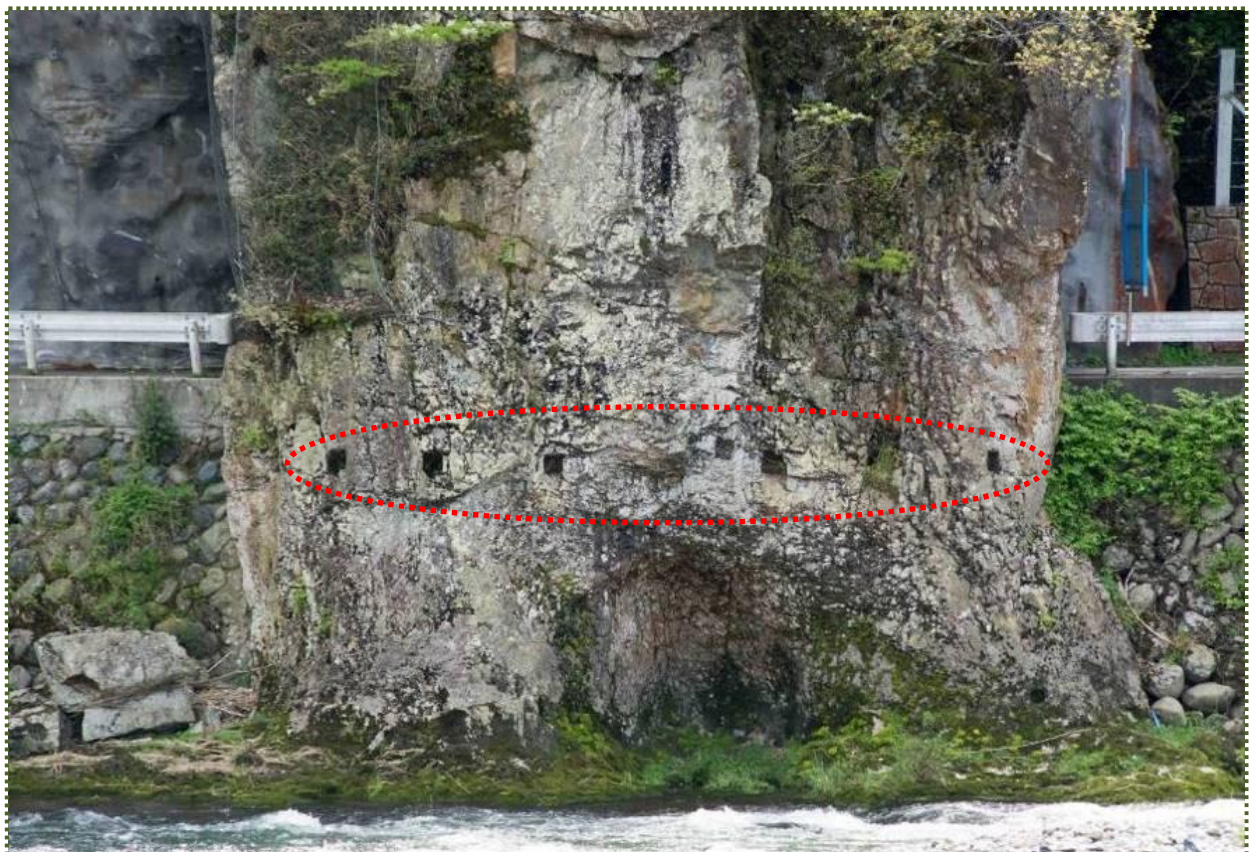


写真-5 「下ほきの奇巖」(赤の破線枠内は角材を差し込む穴)

与位地区は、周囲の山の木を使って薪炭を大量に生産していて、それを牛や馬に4～5俵(≒70kg) 背負わせて山崎まで運んでいましたが、栈橋の上で岩に荷を引っ掛けて転落死することが度々あったそうです。

また、この栈橋は、人馬だけでなく田井地区への用水も通していたそうです。隣村の田井地区は、すぐ東を流れる揖保川から水を上げることができず、そのため水の豊富な与位から水を買っていて、そのやりとりの古文書が山崎郷土研究者の調査により明らかになっています。

栈橋上をどのようにして用水を通したのでしょうか。図-1 はその想像図です。載荷重を軽くするために木樋を使用し、止水性の確保には、恐らく漆喰※2 (しっくい) が使用されたと思われます。

洞門ができて以降は、道路の山側に暗渠を設けて送水しており、現在も写真-6 のようにグレーチングの下で水が流れています。

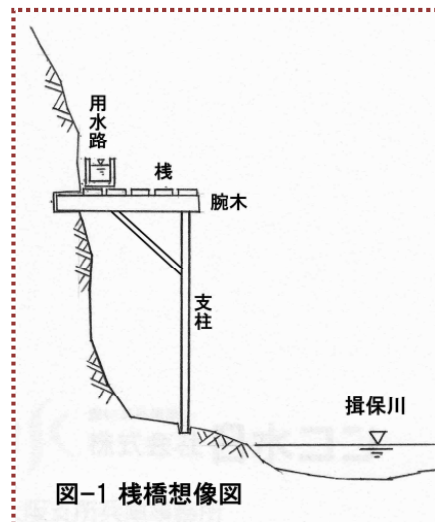


図-1 栈橋想像図

※1 いつの頃は不明: 現地に祀られているお地蔵様の建立年代から、江戸中期の享保の頃には栈橋が架けられていたと考えられる。

※2 漆喰: 日本の漆喰は消石灰を主成分として、骨材、すさ(麻)、海藻のりなどの有機物を混ぜて練り上げたものである。風雨に弱い土壁そのままに比べて防水性を与えることが出来る。炭酸カルシウムは水に不溶であるため、漆喰の保存性は高い。



写真-6 洞門内の田井への送水路(暗渠)



写真-7 田井への送水路
(洞門の南の開渠)

■ 犠牲者の慰霊と旅の安全を祈願して

架設当初の栈橋は水面から60～90cmの所に架けられていたので、増水の度に流されるなどしていたそうです。その後、水面から3～4mの所に架け替えられましたが、洪水の度に落ちてしまい、復旧まで地区は孤立、村人は多大な苦労と不便を強いられてきました。

また、狭い栈橋のため犠牲者も少なからずあったようです。宝暦2(1752)申年9月17日増水中の栈橋を渡っていた3人が落ちて亡くなり、これを哀れに想った与位の小字高尾の多右衛門という方が、お地蔵様を祀って橋の安全を祈願したそうです(写真-9)。

お地蔵様から南に30mほど行った所には小さな祠(写真-10)があって、祠の前にある石には「享保」の文字が刻まれているのがかすかにわかります。

さらに、二つの洞門の間には「題目碑※3」が建てられていて、碑面にはひげ文字で「南無妙法蓮華經」と刻まれています(写真-8)。

※3 題目碑: 日蓮系・法華経系の宗教団体などにおいて勤行の際に用いられる「南無妙法蓮華經」を「題目」という。題目碑は、鎮魂を目的として、その題目を刻んだ供養碑。なお、「南無阿弥陀仏」は念仏という。

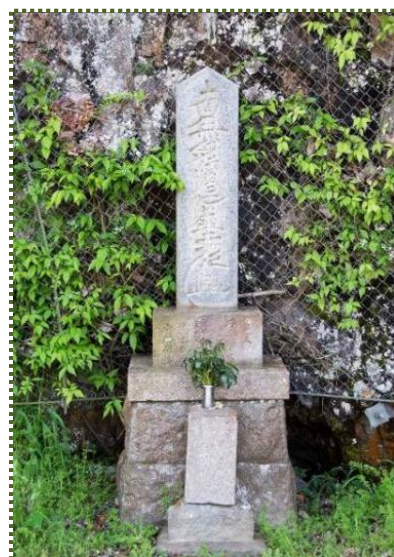


写真-8 題目碑



写真-9 お地藏様

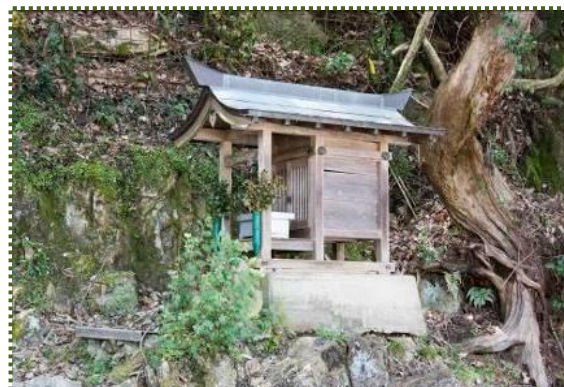


写真-10 小祠

■ 与位の村民が2年がかりで掘った隧道 ～「与位の洞門」

明治36(1903)年頃になって危険な栈橋に代わる安全な道づくりの機運が高まるなか、日清戦争(明治27(1894)～28(1895)年)に従軍した人から火薬の威力を教えられ、大量に購入した黒色火薬※4を使用して2年がかりでやっと人が通れるほどの穴を開けることができました。

昭和初期には、荷車が通れるように広げられ、昭和43(1968)年には大型車が通れるように拡張されました。洞門の内面はモルタル吹付で保護され、現在に至っています。

洞門の南約10mの所に写真-11のような『与位の洞門』の説明板が建てられています。

説明文では、『宍粟郡誌』に掲載されている「下ほきの奇巖」の説明文が引用されています。

なお、「与位の洞門」は与位生産森林組合の所有になっています。

※4 黒色火薬：最古の火薬。組成は硝酸カリウムが60～80%、硫黄が10～20%、木炭が10～20%。摩擦や衝撃によって発火しやすく、爆発の威力は大きくない。10世紀頃の中国が発祥の地とされ、当初は主に兵器用に使われていたが、17世紀のヨーロッパで鉱山における採掘に導入されるようになる。1831年に発明された導火線によって利便性が向上し、炭鉱で多く用いられるようになったが、19世紀後半に発明された無煙火薬やダイナマイトの普及に伴って生産量が急減した。

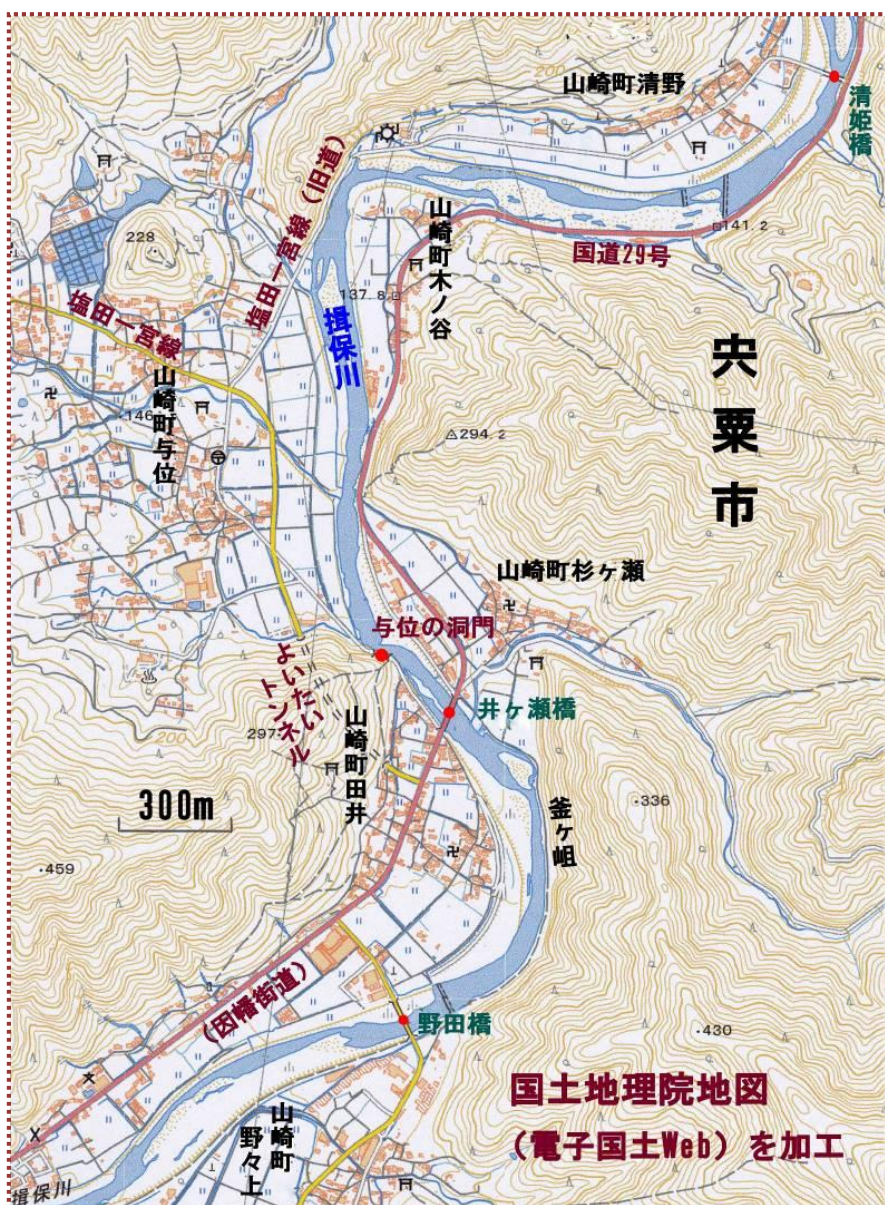


図-2 「与位の洞門」周辺の地図

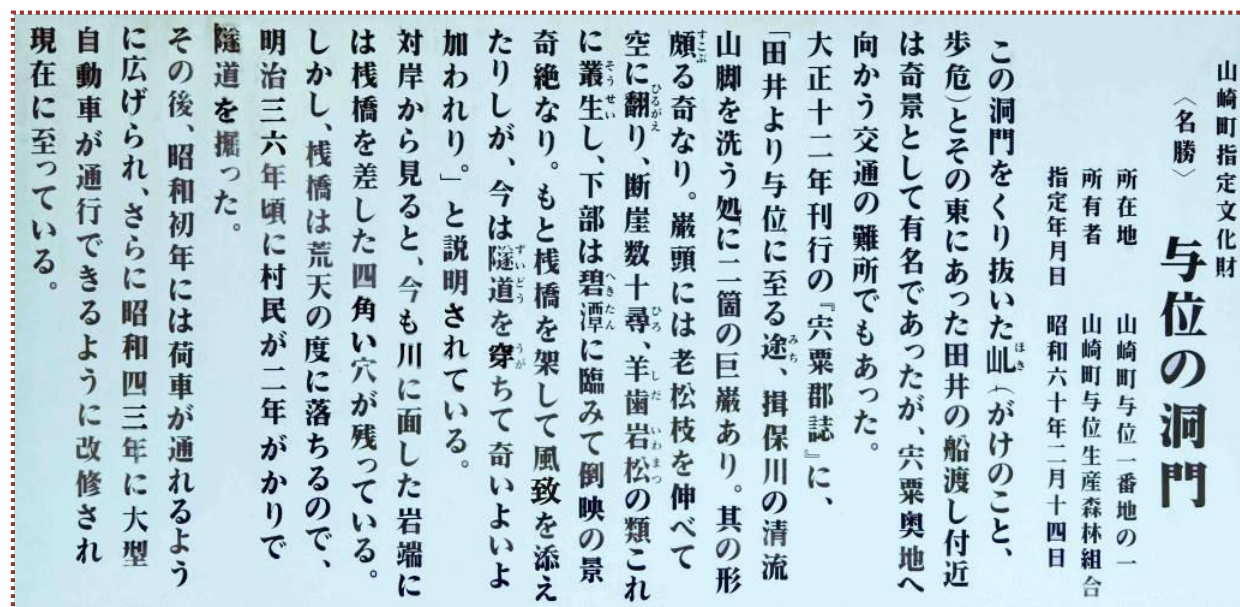


写真-11 「与位の洞門」の説明板

■ 一般県道塩田一宮線バイパス・「よいたいトンネル」開通

与位地区から国道 29 号に至るルートは、一般県道 523 号塩田一宮線を通り揖保川に架かる清姫橋を渡るか、宍粟市道である「与位の洞門」をくぐる 2 ルートのみでした。しかしながら、いずれの道路も狭隘・狭小で乗用車同士のすれ違いが困難な状況であるとともに、平成 2（1990）年、平成 16（2004）年の揖保川洪水時にはいずれの路線も冠水により通行不能となり、与位地区は「陸の孤島」状態に。

このような状況を解消するために、平成 11（1999）年度から進められてきた「よいたいトンネル」を含む 1.2km の県道バイパス工事が完成し、平成 21（2009）年 3 月 21 日に供用開始されています。



写真-12 よいたいトンネル南側



写真-13 よいたいトンネル北側

■ モノローグ

「与位の洞門」の枕詞になっている“下此の奇巖”のルーツが気になって、令和 2（2020）年 8 月下旬に宍粟市立図書館に行ってきました。あたりをつけていた『宍粟郡誌』を見ると、名勝のひとつとして“下此の奇巖”が紹介されていますが、ここで「ほき」に充てる字を間違ったのかも。

当該箇所をコピーした際に図書館の方に話をすると、「以前、図書館に来られた方が同じようなことを言われていましたよ。」とのこと。

気になっていたのは筆者だけではなかったようです。

マメツタ

ウラボシ科に属するシダ植物。樹木や岩に茎を這わせる着生植物で、与位の洞門付近の樹木に着生していた。山間部ではごく普通に見られ、独特の丸い葉をつける。葉は栄養葉と孢子葉の二型がある。栄養葉は着生生活に適応して水分を多く蓄えており、肉厚で丸い。ラン科の着生植物・マメツタランによく似ているがランの方が環境に敏感。



写真-14 マメツタ

【参考資料】

- 1 『穴栗郡誌』 穴栗郡編纂 昭和 48 年 4 月
- 2 『大歩危・小歩危』 徳島県観光情報サイト「阿波ナビ」
- 3 『与位の洞門物語～語り継ぎサロン』 山崎古文書研究会・志水出世 昭和 62 年 12 月
- 4 『災害に備えて～自主防災組織の活動』 総務省消防庁消防大学校 平成 19 年 3 月
- 5 『黒色火薬』 ブリタニカ国際大百科事典
- 6 『一般県道塩田一宮線「よいたいトンネル」の供用開始～地域情勢報告』 西播磨県民局 平成 21 年 2 月
- 7 『与位の洞門、大歩危、国道 29 号、題目、マメツタ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：令和 2 (2020) 年 12 月 『ひょうご水百景』 No.117

改訂：令和 8 (2026) 年 7 月 『ひょうご水百景』 No.117